

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の3年目)

1. 研究課題

東アジアの宗教美術と社会

Religious Art and Society in East Asia

2. 研究代表者氏名

稲本 泰生

INAMOTO, Yasuo

3. 研究期間

2022年4月-2027年3月(2025年3月終了から2年延長)(3年目)

4. 研究目的

本研究では中国の仏教美術を中心に、東アジアにおける宗教美術と社会の関係性について実作例に即した考察を行う。

当研究所には水野清一・長廣敏雄らの中国石窟研究に代表される、仏教美術研究の膨大な蓄積がある。2017～2021年度に組織した『龍門北朝窟の造像と造像記』班ではこの伝統を継承しつつ、今日の国内外における研究水準にみあった基盤の整備に貢献することに重点をおいた。具体的には、所内で新たに確認された龍門石窟の拓本資料群を活用して、造像記の文面・内容を彫刻の造形と照合しつつ確認する作業を行い、北朝期の事例の過半について検討を終えた。

その結果改めて浮き彫りとなったのは、造像の様式・図像・制作過程などを理解する前提として、担い手となった個人・集団の属性や構造、すなわち身分の貴賤、出家在家の区別、性別、血縁関係、出身地などを把握することの重要性である。文字情報が豊富な中国の造像は、こうした観点から宗教美術のあり方を研究する際に、とりわけ有効なモデルを提供する。本研究では引き続き、北朝隋唐期の龍門造像記を中心とする、中国仏教美術関連の文字史料の検討を一つの柱とする。一方で「社会との関係」を共通テーマとしつつ、対象を東アジアの宗教美術全般にも視野を広げて班員による研究発表を行い、多様な事例から議論を深化させる。両者の総合によって学界の共有財産となる基礎資料を蓄積するとともに、文物研究の場に広く応用可能な新たな視点の獲得と、厚みある成果の創出をめざす。

This study focuses mainly on Chinese Buddhist art, and considers the relationship between religious art and society in East Asia based on actual examples.

Our institute had produced an impressive amount of scholarship on Buddhist art, the most exemplary of which being the works on Chinese grottoes by Mizuno Seiichi and Nagahiro

Toshio. Continuing the tradition of these forerunners, the seminar group “Buddhist sculptures and their inscriptions in the Longmen Caves of the Northern Dynasties” was organized from 2017 to 2021 with the aim of contributing to the development of a research foundation that meets the international research standards of today. Specifically, by utilizing the newly confirmed rubbing materials of the Longmen Grottoes from the institute, members from the seminar group checked the content of the inscriptions, and evaluated them in light of their accompanying sculptures. Over half of the extant cases from the Northern Dynasties had been thoroughly discussed and checked in this manner.

A few heretofore understudied factors came to light as a result of our study. Proceeding from a study of such art historical questions as style, iconography and the construction process of sculptures, it is further necessary to understand the role of societal factors such as the social level of the patron, their status as laymen or monks, gender, kinship and origin in the shaping of religious expressions. Chinese Buddhist sculptures provides rich textual information, and our study with such a societal perspective provides a particularly effective model for the study of religious art.

This current study continues to focus on inscriptions from the Longmen Caves of the Northern Dynasties to the Tang period and the textual information for the study of Chinese Buddhist art. Meanwhile, with “relationship with the society” as a common theme, the group members will present their research to broaden members’ horizons on religious art in East Asia in general as well as to deepen discussions by introducing various examples. By integrating the two aspects, we aim to accumulate basic materials that will be a common property of academia, to acquire new perspectives that can be widely applied in the study of cultural relics, and to generate fruitful research results.

5. 本年度の研究実施状況

3年目の2024年度も対面・オンラインのハイフレックス形式で研究会を開催し、メンバーの参加形態は各回ともほぼ半々であった。当班では研究所の蔵する拓本資料を活用した龍門石窟造像記の読解を継続的に行っており、2024年度は賓陽南洞周辺の主要造像記のうち長文のものを取り上げて精読を行った。一方でメンバー各人の専門分野に沿った研究報告に力を入れ、中央アジアから東アジアに及ぶ、仏教関連の遺構と遺物を扱った多彩な発表が行われた。具体的には道教像や日本の密教尊像、雲岡石窟の浮彫や敦煌石窟の壁画、仏教図像に表された楽器、毘沙門天の図像などが取り上げられた。このほか林韻柔氏、王煒氏、井上豪氏をゲストスピーカーとして招き、各々五台山信仰の形成と伝播、山西省の石窟寺院、新疆地区の石窟寺院壁画に関して、最新の研究動向に接する機会を得た。

6. 本年度の研究実施内容

- 2024.4.9 龍門石窟造像記会読「洛州郷城老人仏碑」「洛州河南省思順坊老幼等造弥勒像記」
田中健一
- 2024.4.23 龍門石窟造像記会読「洛州郷城老人仏碑」「洛州河南省思順坊老幼等造弥勒像記」
田中健一
- 2024.5.14 雲岡石窟第6窟に見られるガンダーラ仏伝美術の影響 上枝いづみ
- 2024.6.25 莫高窟第323窟設計意涵探析 — 基于佛教菩薩戒儀式的視角觀察 焦樹峰
- 2024.7.9 龍門石窟造像記会読 「王師德等三十人造像記」 大西磨希子
- 2024.7.16 海を越えた聖山：中国と日本における五台山信仰 林韻柔 中正大学
- 2024.7.24 道教彫刻史をめぐって — 展覧会「道教の美術」から『中国道教像研究』へ 齋藤龍一
- 2024.10.8 豎箜篌の東伝 大平理紗
- 2024.10.22 龍門石窟造像記会読 「洛州郷城老人仏碑」 田中健一
- 2024.11.26 敦煌維摩經变相図の帝王問疾図における「双髻先導者」について 平法子
- 2024.12.11 九世紀の密教彫刻研究 高橋早紀子
- 2025.1.7 山西中晩唐石窟の初步認識 王煒 山西大学
- 2025.1.14 古代クチャの石窟壁画とその思想 井上豪

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

稲本泰生、安岡孝一、フォルテ・エリカ、古勝隆一、倉本尚徳、呉孟晋、向井佑介、佐藤智水、打本和音、大平理紗、蔣天穎、皮艾琳、李奥

学内

田中健一(文学研究科)、大谷弦(文学研究科)

学外

齋藤龍一(東京藝術大学・美術学部)、佐藤有希子(奈良女子大学・文学部)、上枝いづみ(金沢大学・人間社会研究域)、内記理(愛知県立大学・日本文化学部)、アヴァンツィ・カルロッタ(秋田県立大学・総合科学教育研究センター)、伍雅涵(京都府立大学・文学研究科)、山名伸生(京都精華大学・総合人文学部)、大西磨希子(佛教大学・仏教学部)、濱田瑞美(横浜美術大学・美術学部)、篠原典生(中央大学・総合政策学部)、檜山智美(国際仏教学大学院大学)、高橋早紀子(愛知学院大学・文学部)、苦名悠(佛教大学・文学部)、高志緑(大阪大谷大学・文学部)、石松日奈子(東京国立博物館)、田林啓(大阪市立美術館)、王珏人(京都国立博物館)、北村一仁(河南農業大学)、易丹韵(中国社会科学院・考古研究所)、黄盼(中国社会科学院・考

古研究所)、呉虹(復旦大学・哲学学院)、黄蓉(浙江大学)、李瀾(マクマスター大学)、焦樹峰(陝西師範大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1	13 (6)	4 (4)	4 (4)	3 (3)	3 (3)	130 (55)	36 (36)	32 (32)	24 (24)	24 (24)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	1	3 (0)	1 (0)	2 (0)	2 (0)	2 (0)	29 (0)	6 (0)	18 (0)	18 (0)	18 (0)
国立大学 (内女性)	3	3 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	14 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
公立大学 (内女性)	3	3 (2)	2 (2)	2 (1)	1 (1)	1 (1)	15 (14)	13 (13)	13 (13)	13 (13)	13 (13)
私立大学 (内女性)	8	8 (5)	2 (0)	5 (3)	2 (0)	2 (0)	71 (31)	24 (0)	32 (7)	25 (0)	25 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	3	3 (2)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	15 (12)	4 (4)	4 (4)	4 (4)	4 (4)
民間機関 (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	7	7 (5)	6 (5)	6 (5)	5 (4)	3 (2)	20 (7)	6 (6)	6 (6)	6 (6)	4 (4)
その他 ※ (内女性)	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	26	40 (22)	16 (12)	20 (14)	14 (9)	12 (7)	294 (126)	89 (59)	105 (62)	90 (47)	88 (45)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

なし

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 次年度の研究実施計画

2025 年度も、これまでに培ったノウハウを用いて龍門の造像と造像記の研究を継続的に行い、信頼度の高い釈文の蓄積を中心として、学界の共有財産となる基礎資料をさらに拡充させる。具体的には 2023 年度以来行っている初唐期の造像記の読解を、造像の担い手である個人・集団の属性や構造を把握することに重点をおいて行い、龍門石窟の造営過程の復元的理解に向けた共通認識を形成していく。また過去十数回、東アジアの宗教美術と社会の関係性の諸相について、各人の研究課題に沿った発表形式の研究報告を実施してきたが、活発な討論を通して当該テーマに関する班内の理解が大幅に厚みを増した点に鑑みて、その機会を増やしより充実したものとする。それによって、東アジアの宗教美術にまつわる汎用性の高い問題提起が行われる場として、研究会を有効に機能させる。

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

2025 年度は、前身の研究班及び当班ですでに検討が完了した龍門古陽洞及び蓮華洞の造像記について、研究所蔵拓の写真・釈文・解説を集成した資料集の出版に向けた編集作業を継続する。現地踏査による再確認が必要な事例の扱いが問題になるが、龍門石窟研究院とも連携して情報収集に努め、刊行までの時間の短縮に努める。2023 年度からは賓陽南洞の造像記を検討し、学界の共有財産となる基礎資料のさらなる拡充を図っているが、当班において非常に充実した研究発表が積み重ねられていることに鑑み、期間終了に併せ、これらに基づく論考を集成した書物を刊行することも視野に入れている。